

展示を作る新技術： 3D プリント標本ができるまでの、ちょっと長い道のり

自然・環境評価研究部 地球科学研究グループ

長野 あかね



近年、博物館では3Dプリンタを用いた標本制作が重要な技術となっています。丹波地域の篠山層群から産出する化石は、数ミリ単位のきわめて繊細な骨片が多く、従来の型取りでは実寸大での再現が困難でした。しかし、3Dプリンタの導入により、資料本来のスケールで形態を復元できるようになり、研究・展示双方の可能性が大きく広がりました。

しかし、その制作過程には研究者ならではの慎重さが欠かせません。CTや3Dスキャンで得られたデータの編集では、わずかな補正が骨の形態を変えるため、研究結果に影響する可能性があります。印刷後のバリ取りや研磨も同様で、削りすぎれば重要な形態情報が失われてしまいます。

展示ケースに並ぶ3Dプリント標本の背後には、こうした微細なかたちを読み取り、科学的な正確性を保証する研究者や職人の手仕事があります。3Dプリンタは強力な道具ですが、最後に標本を「科学的に正しい姿」に仕上げるのは、人の眼と経験なのです。



図1：3Dプリンタ製のレプリカ展示（3F展示室）

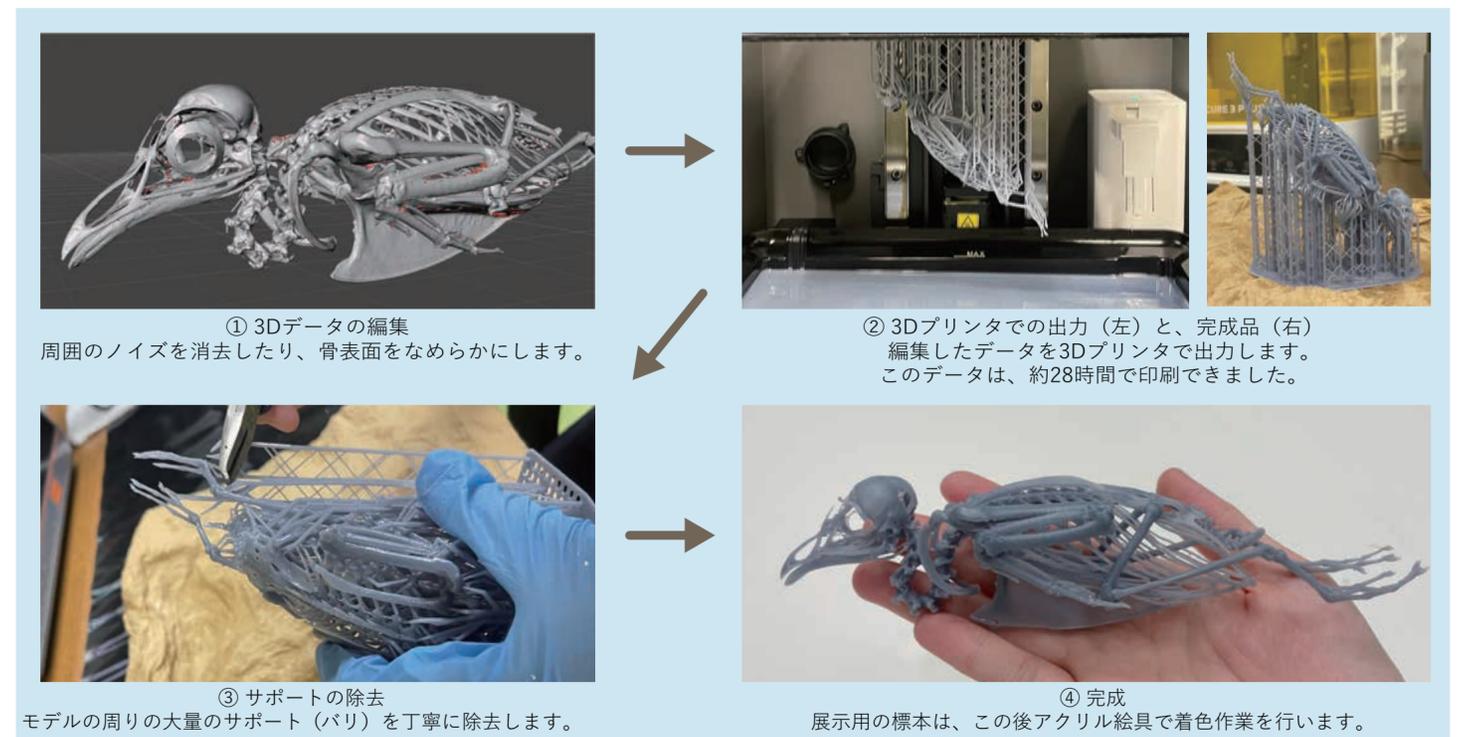


図2：3Dデータの編集から、モデルの完成までの作業の様子（現生種のヒメウミスズメを例に）